

第1弾 2018年10月6-8日

10月27日に第2弾を追記(3ページ以降)

1. スペリングの間違い訂正

- ・第4曲 a 福音史家4行目 der da hies Kaiphas →○ hieß
- ・第11曲 福音史家 Er antesortete und sprach →○ antwortete
- ・第26曲 福音史家2回目 der Zwölfen einer, →○ Zwölfen
- ・第27曲 a ソプラノ・アルト二重唱 Mont und Licht →○ Mond
- ・第67曲 アルト・ソロ in solche Not gebacht →○ gebracht

※その他

(1). 行頭の大文字と小文字、行末のヒリオドとコンマについては多数修正。

(2). 略語の中のアポストロフィについては、

Carus 版ではほとんど無いが、単語の素性を理解するには必要と思い、旧全集時代のブライトコプフ版楽譜を参照して、付けました。

Seel → Seel' (Seele)、Ehr → Ehr' (Ehre)、

Will → Will' (Wille)、Sünd → Sünd' (Sünde)

Herr, bin ichs? → bin ich's (bin ich es) etc.

しかし例えば gericht' を gericht't にすることはしませんでした。

2. 大文字・小文字の違いかと思ったら、別の問題だった件

イエス死後のコラール Nr.62 最終行

Kraft deiner Angst und Pein. →○ kraft

この最初の Kraft は「力 power」という名詞ではなかった。

改めて調べてみたら、何と前置詞で、「～の力によって」という意味になる。

訳は結果オーライで「あなたの不安と痛みの力によって」と訳してあった。

大文字で始まる名詞 Kraft として正しく逐語訳しようとする、文法的に正しく説明できないのである。

3. 欠落していたのを補う

・最終合唱 Höchst vergnügt ～の前に、第2コーラスの

Ruhet sanfte, sanfte ruht! が抜けていたので、挿入した。

4. 翻訳の訂正・修正

- ・冒頭合唱 1 行目 helft mir klagen

klagen は「嘆く」「訴える」の 2 つの意味があります。
前稿では「訴えを聴いてください」と訳しましたが
伝統も踏まえて「嘆き・訴えを聴いてください」としました。

- ・第 35 曲 テノール・アリア 最終行 meines Herzens Unschuld

「私の無実の心」 → 正確な直訳は「私の心の無実」

- ・第 66a 福音史家 下から 3 行目 Rüsttage

これについては、前回歌ったシュッツ「ヨハネ受難曲」に
「der Rüsttag in Ostern=過越の準備の日」というのがあったので
それに引きずられて、このマタイ前稿でも「過越の準備の日」と訳し
「これだとイエスの最後の晩餐が、過越の食事でないことになる」
などと、おかしな解説をつけていました。これは間違いでした。

↓

◎ Rüsttage は「安息日の準備の日」という意味です。

ユダヤ教では安息日は土曜日ですから、金曜日ということになります。

この場面は、「Des andern Tages,der da folget nach dem Rüsttage」
すなわち「あくる日、すなわち“安息日の準備の日”の翌日に」となる。
要するに、祭司長やパリサイ派の人々は、イエス処刑の翌日、
つまり、よりによって「安息日」にピラトの所に押しかけて、
「イエスの墓を見張るように命令してください」と陳情した。
それをマタイの著者（この人はユダヤ教からの連続性でキリストを
解説しようとした）は、このユダヤ人幹部らに付度して、
つまり彼らの行動が安息日規定に違反しているかもしれないので、
それをはっきり暴露する記述にならないようにしたのである。

5. Carus 版のみ他の楽譜と違う点

- ・第 8 曲 ソプラノ・アリア「Blute nur」の中間部

「das an deiner Brust gesogen」の an が aus になっている。

↓

この件については、旧ブライトコプフ版、ベーレンライター版とも
an なので、ほとんどの録音は an である。

しかし、バツハセセミナーでオルガンを提供されている石井賢さんからの
Facebook でのご教示によれば、「オリジナルの楽譜に an と aus の両方
がある」とのこと。だから Carus 版が間違っているわけではないらしい。
an なら「あなたの乳を吸う」、aus なら「あなたの胸から(母乳を)吸う」

以下、10/27 追記 訳の訂正・改訂・注釈

1. スペルミス訂正

- ・第 26 曲 イエス 3 行目 in der Süder →○ Sünder
- ・第 33 曲 大祭司の最後の単語 Zeugen →○ zeugen(動詞なので)
- ・第 51 曲 アルト・レチ Geiselung →○ Geißelung

2. 訳の訂正・改訂

- ・第 6 曲 アルト・アリア最終行 treuer Jesu, dir gebären
前稿では「注ぎます」としていたが、gebären は「産む，生み出す」
なので、2 行上から「私の涙の滴は、心地よい香料を、誠実なイエスよ、
あなたに生じさせるのです」とした。
- ・第 12 曲 全面改定
Wiewohl の 1 行目を直接受けるのは 3 行目、2 行目の daß 節は 1 行目の理由。
「私の心は涙の中を漂う」「その理由はイエスが別れを告げるから」
「にもかかわらず wiewohl しかし doch 彼の契約は私を喜ばせる」。
後半の下 3 行は時制が現在形なのだが、内容的には Wie 以下 2 行は
「地上にいた時は彼と共にある人を悪く思うことが出来なかった」
そのように「世の終わりまで愛してくれる」というように訳すことにした。
- ・第 22 曲 バス・レチ Fallen 落とし穴 →「墮落」に訂正
- ・第 23 曲 バス・アリア
1 行目の「bequeme 承知する」内容を、2・3 行目に訳すことが多く、
私も前稿でもそうしていたが、やはり 3 行目は独立した節である。
「十字架と杯を受けることを承知しよう」「もちろん私は彼にならって飲もう」。
5 行目 der 節も fließet を「流れ出る」として分かりやすく改訳。
- ・第 24 曲 イエス willig そのつもり→「しっかりした」と訂正
「精神はしっかりしていても肉体は弱い」
- ・第 28 曲 イエスから逃げ去った →「イエスを見捨てて、逃げ去った」
- ・第 38c 曲 「ペテロはイエスが彼に言った言葉を思い出した」
→関係代名詞でつないでいるわけではないので、次のように分けた。
「ペテロはイエスの言葉を思い出した。イエスは彼にこう言ったのだった。」

• ärgern をどう訳すか

ドイツ語で sich ärgern an ~で「～に腹を立てる、苛立つ」という意味である。第 14 曲では、ここをギリシア語の原文 skandalidzo 「信仰・正道から脱落する」を日本聖書協会の伝統的な訳である「つまずく」を採用した。田川建三氏の直訳も「つまずく」である。

なお、マルコ福音書 14:27 では単に「つまずく」だが、それを写したマタイでは「私につまずく」となっている。ルターはマタイだけでなくマルコの文も「私に(an mir)つまずく」と同じに訳してしまっている。

• 第 11 曲 最後の晩餐でのワインのこと

ここの部分、ギリシア語聖書原文を比較すると、マルコ福音書 14:25 では「葡萄から造られたもの」である。これをマタイ福音書が「葡萄から造られたこのようなもの」と書き換えたのは、葡萄から造られるのはワインだけではないからであろう。ルター訳でマルコ福音書の当該部分を見ると「vom Gewächse des Weinstocks」で、diesem（これ）が無いのがわかる。

ところで Gewächs は「～産のワイン」という意味なので、マタイのこの文だけなら、「この地のワインは飲まない。父の国で飲むまでは。」と訳するのが良いのではと思いついた。しかしその後、上記のマルコ・マタイの記述の違いを知って、それは見当外れとわかった。

※この部分はもう 1 つ面白いことがある。マルコ福音書 14:25 冒頭はルター訳で「Wahrlich Ich sage euch」である。ギリシア語原文も「Amen」で始まっている。ところが、マタイ福音書では冒頭の Amen が削除されているので、ルター訳も Ich sage euch: となっている。

Amen で始まるイエスの威厳ある台詞は、マルコよりもむしろマタイ著者の好みのはずなのに、なぜマタイはここで Amen を削除したのだろう。